

氏 名 八木 風輝

学位(専攻分野) 博士(文学)

学位記番号 総研大甲第 2208 号

学位授与の日付 2021年3月 24日

学位授与の要件 文化科学研究科 比較文化学
学位規則第6条第1項該当

学位論文題目 Formation of Music of Kazakh Diaspora in Mongolia: A Case
Study of the Musical Practices of Professional Performers

論文審査委員 主 査 島村 一平
地域文化学専攻 准教授
岡田 恵美
比較文化学専攻 准教授
福岡 正太
比較文化学専攻 教授
坂井 弘紀
和光大学 表現学部 総合文化学科 教授
寺田 吉孝
総合研究大学院大学／国立民族学博物館
名誉教授

博士論文の要旨

氏 名 : 八木 風輝

論文題目 : Formation of Music of Kazakh Diaspora in Mongolia:
A Case Study of the Musical Practices of Professional Performers

本論文の目的は、モンゴル国のカザフ人ディアスポラの音楽の形成と普及の歴史的過程から、先行研究[Diener 2009]で言及された「複数の祖国」をめぐる関係性を明らかにすることである。そのため、モンゴル国とカザフスタンの両祖国の関係を軸とし、さらに中国やソ連などが関係する社会主義期から現代の国際関係と社会背景に注目しつつ、カザフ人の音楽の形成を解明する。そして、その過程から見えてくる2つの祖国をめぐる関係性を議論する。

ディアスポラとは、祖先がかつて住んでいた国から離れ、祖国とは異なる国（ホスト国）で生活している集団のことを指す。現在カザフ民族は、カザフスタンを中心に、ロシア連邦、中国、ウズベキスタン、モンゴル国に居住している。モンゴル国のカザフ人は、国内の人口の約4パーセントを占め、約10万人がバヤンウルギー県に集住している。当県は、社会主義期の1940年に設立され、県内はカザフ人がマジョリティである。そのため、モンゴル国にありながら、カザフ文化が維持されている。職業的な演奏者は、劇団や結婚式での音楽実践を通じて、モンゴル国のカザフ音楽の形成と普及をけん引してきた。本論文は、彼らのこうした音楽実践に焦点を当てる。なぜなら、彼らの音楽実践は、各時代の情勢の影響を受けるとともに、モンゴル国のカザフ音楽の位置づけを確立させてきたからである。

本論文は、6章で構成されている。第1章では、研究の背景と目的、そして先行研究、調査手法、本論の構成を提示した。研究の背景では、モンゴル国のカザフ研究で示されてきた「2つの祖国(two homelands)」が、どのように論じられてきたかを説明した。モンゴル国のカザフ人の中で、祖国概念は2つあり、歴史的に祖先が居住していた祖国で、現在のカザフスタンを指し示す、*atameken*と*atajurt*、そして、彼らが居住するモンゴル国内、特にバヤンウルギー県内の地を、*tygan jer*と区別している。この2つの祖国に関する人々の概念を明らかにするために、旧ソ連における民族と文化の関係、そして、民族音楽とアイデンティティに関する先行議論を紹介した。その先行議論を踏まえ、社会主義期の音楽の近代化と、モンゴル政府による国民統合を想定した少数民族の音楽収集と演奏、更にポスト社会主義期の音楽の普及という歴史的展開に沿った本研究の構成を示した。

第2章では、調査地であるモンゴル国バヤンウルギー県とそこに住むカザフ人に関する歴史と民族誌的情報を、生業、食、言語の視点から示したうえで、彼らの演奏する

音楽の現状について提示した。彼らは、放牧を基礎とした生業を有し、日々の生業や帰属する土地、親族関係に関する曲を、ドンブラという 2 本弦の撥弦楽器を用いて演奏してきた。

第 3 章では、社会主義期のモンゴル人民共和国のカザフ音楽の近代化の過程と近代化によって生じたモンゴル国のカザフ音楽の演奏実態を明らかにした。1950 年代にバヤンウルギー県では、「バヤンウルギー県音楽ドラマ劇場(BMDT)」が設立された。その結果、カザフ共和国の支援を受けて、当県のカザフ文化を実践する基盤が整えられた。1960 年代以降、バヤンウルギー県を取り巻く国際関係の中で、県内の演奏者の演奏する音源の収集と記録が行われ、バヤンウルギー県のカザフ音楽の保存と継承が進展した。当時、中ソ対立という国際関係の緊張下で、バヤンウルギー県は中国とソ連の国境地帯にある県として重要性が高まった。そして、中国側の情報傍受を目的に、バヤンウルギー県にラジオ局が設立された。この活動のために、バヤンウルギー県ラジオ局は、磁気テープや再生機といった当時の最新の音響再生技術を導入した。このラジオ局の設立をきっかけに、ラジオ局の職員と BMDT の演奏者らの主導で、当県の音楽の採譜と録音事業が進められた。BMDT によるカザフ音楽実践と、ラジオ局による音楽の録音によって、バヤンウルギー県のカザフ音楽は形成された。その一方で、70 年代から 80 年代の首都ウランバートルでは、「モンゴル化したカザフ音楽」がモンゴル人によって演奏された。これは、モンゴル国の国民統合の下で少数民族の音楽の収集と演奏によって登場したカザフ音楽であった。

第 4 章と 5 章は、資本主義経済に移行した後のバヤンウルギー県内の職業演奏者の音楽活動を論じている。モンゴル西部の中国とロシアの国境開通やメディアの普及に伴い、社会主義期とは異なる音楽が流通した。バヤンウルギー県のカザフ人は、国外のカザフ音楽に触れる機会が増え、演奏される音楽の多様化が進展した。第 4 章では、その一つの事例として、資本主義期に BMDT がどのような活動を行ってきたかを、カザフの「改良楽器」の演奏者の育成と、国内外の劇団とのコラボレーションから明らかにした。1990 年代から、モンゴル国のカザフ人の半数以上がカザフスタンへ移住した。また、資本主義経済へ移行した直後は、各劇団に配分される文化予算が減額された。その結果、1990 年代から 2000 年代の BMDT は、所属の演奏者が大幅に減少し、活動基盤も脆弱になった。しかし、BMDT は 2010 年以降、活動の幅を広げると同時に、カザフスタンの改良楽器を用いた演奏を続けるために、新入団員に対して改良楽器を学ばせた。2010 年代後半から、BMDT は国内外の劇団とのコラボレーションを行うようになった。そのコラボレーションには、BMDT の団長の意向が働いている。この団長は、国政選挙で政権与党になった政党によって擁立された人物である。以上の BMDT の活動は、社会主義期から続く文化機関が、演奏形態や内容を維持するための戦略的な活動の事例として位置づけられる。

第 5 章では、資本主義経済下で新しく職業化した結婚式の司会芸能職「タマダ」が、

カザフスタンのカザフ音楽を普及する役割を果たしたことを明らかにした。1990年代のバヤンウルギー県では、天幕や各個人の家で結婚式が行われた。しかし、1990年代末に結婚式のための大規模な宴会場が開設された。タマダは、この宴会場の開設と同時期に職業として誕生し、式進行と音楽演奏を行うようになった。彼らは、式次第の内容を洗練させ、コンサート風の結婚式の形式を確立させた。また、タマダらは、人々から高い評価を得るために、ギターや民族楽器による生声での演奏から、最新のカラオケ音源を利用した演奏を取り入れることで、民衆を惹きつけようとした。その結果、当該地域で流行している最新の楽曲が結婚式で盛んに演奏されるようになった。1990年代から続く国内外のカザフ音楽の流通を通じて、タマダたちは、県内の結婚式で、カザフスタンの音楽の普及を進めてきたのであった。

第6章の議論と結論では、カザフ人ディアスポラの複数の祖国を巡る関係性を、音楽の近代化における祖国の非対称性、モンゴル国のカザフ音楽の形成における両祖国の対等性、ホスト国とディアスポラの関係、音楽の普及、中国とロシアの関与、そして今後の課題という7点から議論した。そして、社会主義期の音楽の近代化や資本主義下の音楽の流通から、祖国の非対称性が見えた。その一方で、ラジオ局のアルトゥンコルの分類体系から、祖国の対等性が見える。このように、モンゴル国のカザフ音楽の実践において、2つの祖国の非対称性と対等性が混在していると結論付けた。

博士論文審査結果

Name in Full
氏 名 八木 風輝

Title
論文題目 Formation of Music of Kazakh Diaspora in Mongolia:
A Case Study of the Musical Practices of Professional Performers

出願者の博士論文は、モンゴル国のカザフ人ディアスポラを対象に社会主義時代における音楽文化の形成プロセスとポスト社会主義期における職業音楽家に焦点を当てて音楽文化の変容の意味を検討することで、彼らのアイデンティティのありかを複数の「祖国(homeland)」との関係から探求したものである。

カザフ人は民族の「祖国」であるカザフスタン以外にも、ロシア連邦、中国新疆ウイグル自治区やウズベキスタン、そしてモンゴル国に跨がって居住している。本論では、こうしたカザフ人ディアスポラの中でも、カザフ人人口が 90%以上を占めるモンゴル国バヤンウルギー県ウルギー市のカザフ人の職業音楽家たちの歴史と現在に焦点を当てている。

モンゴル国のカザフ人は、もともとカザフ草原（現在のカザフスタン共和国）に居住していたが、その一部が 18 世紀中葉にロシア帝国に対する帰属を拒み、アルタイ山脈南嶺（現在の中国新疆ウイグル自治区）に移動した集団の末裔である。さらにその一部は、19 世紀中頃、清朝と衝突する中で、アルタイ山脈の北嶺（現在のモンゴル国バヤンウルギー県）に移住してきた。その後、20 世紀初頭に外モンゴル地域（現在のモンゴル国）が清朝から独立した際、「モンゴル国民」となった。彼らはモンゴルで社会主義による近代化を迎えるが、20 世紀末、社会主義体制が終わると、その半数以上がカザフスタン共和国に「帰国」したことで知られている。

本論において出願者は、バヤンウルギー県における断続的なフィールドワークやアーカイブ資料の収集に加えてカザフスタンにおいてもフィールドワークおよび資料収集を行い、それらに基づいて、社会主義期からポスト社会主義期にいたるまでを時系列に従って論じている。その理論枠組みは、ディアスポラ論やポスト社会主義のエスニシティ論に依拠している。本論のタイトルは「音楽の形成」となっているが、音楽や歌詞の分析よりも社会主義時代の音楽文化の形成過程に主軸を置いた歴史人類学的研究である。また本論は、調査対象者を都市で活動する職業音楽家の実践に絞った都市研究でもある。

この博士論文は 6 章で構成されている。第 1 章では、研究の背景となるディアスポラ論と研究目的に始まり、ソ連における民族文化や音楽文化とアイデンティティに関する先行研究が紹介されている。その上で本論の位置づけや研究方法が提示される。本論の対象は「モンゴル国内のマイノリティ」としてのカザフ人であるが、モンゴル国内のエスニック集団に関する先行研究は、この「ソ連の音楽文化」の中で簡単に扱われている。

第 2 章は調査地の概要である。まずモンゴル国の概要やバヤンウルギー県の歴史・地理的概況が紹介された後に、ウルギー市の産業ではなく県内の主な生業である牧畜のライフサイクルが説明される。次に食文化とモンゴル国内だがカザフ語が公私にわたって使用さ

れている言語状況が説明される。最後にモンゴル国内のカザフ人の音楽文化と題して、牧畜やバヤンウルギー県の自然やケレイやナイマンといった部族集団への愛着などが2本弦の撥弦楽器ドンブラを用いて演奏されてきたことが紹介される。

第3章では、社会主義体制下で、ドンブラを伴奏とする歌などを中心とするカザフ人の伝統音楽が近代化されていく過程が論じられている。1950年代、「バヤンウルギー県音楽ドラマ劇場(BMDT)」が設立され、職業音楽家が誕生する。牧畜民たちの間で演奏され楽しまれていた音楽は、劇場という社会空間へ囲いこまれていくことになる。またこの劇場(劇団)の設立で特徴的なのは、ソ連のカザフ・ソビエト社会主義共和国(現在のカザフスタン共和国)から支援を受けて音楽の知識や楽器製造法、音楽家の養成などが行われたことである。職業音楽家も、カザフ・ソビエト社会主義共和国に留学した者を中心に生み出された。

1960年代、中ソ対立が始まると、中国にプロパガンダ放送をするため、国境地帯であるバヤンウルギー県にラジオ局が開設された。当時、最新の音響録音再生技術がラジオ局に導入された。BMDTの演奏者たちは、その技術を使って県内の民俗音楽の録音や採譜を進めた。1970-80年代になると、カザフ音楽をモンゴルの国民文化に統合するため、「モンゴル化したカザフ音楽」が創られていった。すなわち首都ウランバートルで、モンゴル人歌手によって、モンゴル語で馬頭琴などのモンゴルの楽器を伴奏にカザフ音楽が歌われるようになったのである。

第4章では、ポスト社会主義期のBMDTの音楽活動の様相が論じられている。バヤンウルギー県から中国新疆ウイグル自治区やロシアとの国境の通過が認められ、カザフスタン共和国への旅行も自由化された。こうした中、カザフスタン共和国への移住が進むと同時に、周辺地域の音楽が音楽カセットなどを通じて流れ込み、音楽が多様化した。一方、一時活動が停滞したBMDTは、2010年代に入るとカザフスタンの改良楽器による演奏者の育成を行い、社会主義期に設立された民族楽器オーケストラを維持した。またこの章では、フィールドワークを通じて、BMDTが音楽の教育機関としての機能も備えていることも明らかにしている。

第5章では、結婚式などの宴会の場において司会をしつつも歌も歌う司会芸能職「タマダ」の実践を通じて、彼らの音楽文化の現代的な変容を論じている。従来、カザフ人の中では、個人の天幕や固定家屋で宴会が催されてきた。ところが民主化以降、ウルギー市に宴会場が次々と開業すると、そこでMCを行う「タマダ」と呼ばれる人々(ほとんどが男性)が宴会の場で活躍するようになる。従来、数日に渡って行われていた宴会は、資本主義的利潤追求と近代的時間概念の導入によって、式次第が整理された「コンサート風の結婚式」へと変貌した。こうした新しい宴会の場では、ドンブラやギターの生演奏よりも、カザフスタンのポピュラー音楽がカラオケ音源を使って歌われるようになっていることが報告されている。

第6章の結論では、カザフ人ディアスポラの複数の「祖国」の問題に立ち返る。従来の研究では、カザフ音楽の歌詞の表象する内容の分析から複数の故郷(multiple homelands)を持つことが論じられてきた。本論では、「父祖の地(Father land)」と「生誕地(birthplace)」のあいだに非対称性(asymmetry)があるとした。それはバヤンウルギーの職業音楽家にとって、カザフスタンが音楽的知識の供給源であり、教育を受ける場であったことから言

えると出願者は主張する。その一方で対等性（equality）つまり、カザフスタンとバヤンウルギーどちらも「祖国」とする見方があるのも否めないとする。またモンゴル国との関係から見たカザフ人ディアスポラの音楽文化に関して、従来の抑圧説（カザフ文化はモンゴルに抑圧された）と構築説（社会主義時代に音楽が収集・記録され「伝統文化」に昇華した）に対して、本論は、音楽の内容に注目するか、音楽文化の形成過程に注目するか、の違いだと指摘した。さらにカザフ人ディアスポラの音楽形成において、中国やソ連といった周辺国との国際関係の重要性も指摘している。

以上、本論文は、職業的な音楽家に注目し、社会主義時代には音楽劇場に所属する職業音楽家の登場を通じて、モンゴルのカザフ人の音楽を巡る社会制度や演奏形態がいかに形成されてきたか、明らかにした点において高く評価できる。また第 5 章部分においては、伝統的な宴会の場であった結婚式において、ポスト社会主義時代に新たに誕生した「タマダ」という職業的音楽家・司会者を通して、最新の（カザフスタンの）ポピュラー音楽が受容・実践されているという逆説的な現象を提示しながら、当該対象の音楽文化の変容を示した点も本論文の大きな成果であろう。

以上のような成果のある本論文であるが、問題がまったくなかったわけではない。第一にウルギー市の音楽文化が時代に応じて敏感に変化していく様は、いみじくもこの町が「祖国」カザフスタンと社会主義期から現代にいたるまで、常に人やモノ、情報の往来があったことを示している。これについては故郷の喪失感を要件とするディアスポラ論との十分な議論が必要だと思われる。加えて当該集団の離散へと至る歴史や彼らのディアスポラ表象（歌の歌詞など）の記述や分析にも注意が払われるべきであった。

こうした課題を残すものの、カザフ語・モンゴル語・ロシア語・英語を駆使しながら、フィールドワークと文献資料を渉猟し、社会主義期の音楽文化の形成と変容を描き出すことに成功した点は十分評価できよう。以上の理由により、本審査委員会は、本論文が学位の授与に値すると判断するものである。